熊日1971.12.13

ハンストを中止

新認定患者ら 座り込みは続行

チッソ本社

水俣病補償交渉で東京・丸の内のチッソ本社に泊まり込み、十日午後から同本社社長室前でハンストにはいっていた水俣病新認定患者・家族の川本輝夫さん(四〇)ら六人は、十二日午前付き添いの医師団からドクターストップがかかって、四十二時間に及んだハンストを中止した。

川本さんは同日午前十時半ハンストをとくにあたって「チッソはこれまで多数の水俣病患者を殺傷し、不具者にして口をぬぐい、逃げ去ろうとしている。私たちは六日以来の慣れない話し合いに心身とも疲れ果てた。医師団のすすめもあってハンストをとくが、今後は島田社長の健康回復まで長期にわたり、チッソ本社内にとどまり、チッソの出方を待つ」という声明文を読み上げ、そのまま社長室前でのすわり込みに移った。なお、患者家族の森清さん(五四)と柳田タマ子さん(四七)は同日夕東京駅発特急「はやぶさ」で帰途についた。

(東京支社)

"ああ疲れた、ハンストを中止し記者会見する水俣病新認定患者たち

新たに四人が上京

本社の座り込みに合流

チッソ東京本社での水俣病新認定患者とチッソとの交渉は暗礁に乗り上げたかっこうになっているが、現地水俣に残ってすわり込みを続けていた出水市下鶴淵、花山治太郎さん(七三)、芦北郡津奈木町福浜、岩崎満さん(四七)らと日吉フミコ水俣病市民会議会長など四人が十二日午後十時三十九分水俣駅発特急「櫻島」で上京した。

チッソ東京本社では新認定患者家族ら六人が交渉に当たっていたが、ハンストにドクターストップがかかるなど疲労しており、残っている患者家族は東京の患者家族のことを心配、十二日には患者側がチッソ水俣支社に話し合いを申し入れ、応対に出た東平圭司支社総務部長に「現地のもようがよくわかっている支社のものが患者といっしょに上京して交渉を再開するよう働きかけてくれ」と要求した。これに対し東平部長は「東京へ行かれた理由は水俣ではらちがあかないからだと思う。社長は倒れているし、私たちが行っても力にはなれないと思う。しかし現地からの要望は本社に伝えます」と答えた。

四人は本社のすわり込み患者家族と合流、チッソとの交渉に加わる予定。